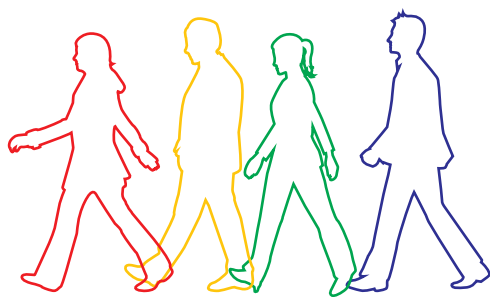
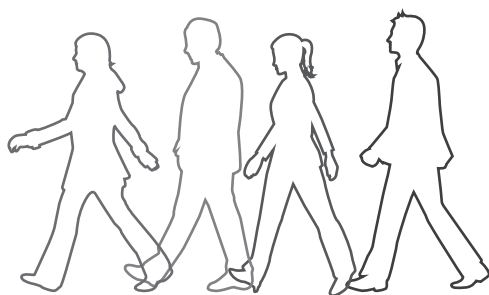


これから
の
国際共修教育を考える
コロナ禍
における
オンライン授業実践



北海道大学
HOKKAIDO UNIVERSITY

これから
の
国際共修教育を考える
コロナ禍
における
オンライン授業実践



はじめに

北海道大学では、2013年度から、留学生と日本人学生がともに原則として日本語で学ぶ「多文化交流科目」という授業を提供しています。2012年度に、大学がグローバル人材育成推進事業（当時）に採択され、日本人学生の国際性の涵養と海外留学促進を目的とした「新渡戸カレッジ」を創設したことにより、カレッジの修了要件にかかる科目として、多文化交流科目の提供を開始しました。基本的に、留学生に対しては、高等教育推進機構国際教育研究部が提供する日本語科目の一つとして、一方、日本人学生に対しては、全学教育科目・一般教育演習（フレッシュマンセミナー）の一つとして、双方から乗り入れるかたちでの科目提供を行なっています。

これまで10年近くにわたり、試行錯誤を繰り返しつつ、少しずつではありますが、制度整備を図ってきました。また、集中講義やオンラインでの海外協定校との協働学習による提供など、授業形態の多様化も進めてきました。最近では、学内の他組織や地域・他大学との交流および外部講師の招聘等、さまざまな取り組みも少しずつ成果を残しつつあるとの実感を持ち始めていたものの、周知のように、2019年度末以後の新型コロナウイルス感染症の拡大により、本学でもオンラインでの授業提供が原則とされ、「交流」を軸とする多文化交流科目の提供にも大幅な変更が求められました。

本年度は、今年度（2020年度）1学期は、授業開始時期を例年より1ヶ月遅らせ、オンラインでの授業提供のため、さまざまな研修・情報が提供されました。その間、対面での授業実施に向けた準備も視野に入れつつ、最終的には、学内外の状況等を勘案し、地域に向く形態の授業については、感染症拡大防止の観点から、少なくとも1学期は開講中止とすることを決めました。また、著作権等の問題に懸念が残ることから、これまで特に留学生に人気のあった「日本マンガ」をテーマとする授業も、オンラインでの提供を余儀なくされる間は、開講中止とすることとしました。これらはいずれも授業担当者の判断によるものではありませんが、学生に混乱のないよう、日本語科目や全学教育科目との足並みは揃えるよう、常に意識してきました。

さらに、その他の授業についてはオンラインでの開講は決まったものの、渡日自体が難しく、かつ時差等の関係で同時配信の授業に参加できない留学生に対しての対応が課題として残りました。先にも言及しましたが、多文化交流科目は、そもそも、日本人学生と留学生の「交流」や「協働」を柱とする科目群です。これまで対面で実施してきた際にも、グループワークを活動の基本としてきました。そのため、オンラインとはいえ、交流・協働活動の「場」に参加できないことは致命的でした。しかし、かれらの学習権も保証しなければなりません。また、授業を進めるなかで、対面とはちがう、オンラインだからこそ求められる、「交流」を促進するしくみの必要性も見えてきました。

このブックレット第6巻は、このような状況のなかで、われわれが実践してきた各授業について、特にオンラインでの提供に伴い必要とされた授業実践上の工夫や課題を紹介するものです。今年度初

めての試みを発表する・まとめてみることを主眼としたため、各授業についても、また全体としても整理されたものではありません。しかし、このように、必然に迫られての「オンライン」による授業提供が、多様な背景をもった学生の「交流」の意義や効果、また一方で課題をより鮮明に描き出してくれたのではないかと、われわれは考えました。そのため、読み手に多様な解釈を与えることになることは承知で、あえて、今年度の授業報告を刊行することとしました。

このブックレットは、2020年度に行なった多文化交流科目シンポジウムの内容をまとめたものです。当日は、webinarの形式で行ったこともあり、大変多くの方にご参加いただきました。ありがとうございました。

なお、このブックレットの作成にあたり、北海道大学国際広報メディア観光学院大学院生の千葉佳奈美さんにテープおこしをいただきました。千葉さんにも、この場をお借りして、お礼を申し上げます。ありがとうございました。

これから
の
国際共修教育を考える
～コロナ禍における
オンライン授業実践～

目次

はじめに 03

授業実践報告

札幌を「フィールドワーク」する

青木 麻衣子 11

北海道大学を発見しよう	
奥本 素子・朴 炫貞	19
考え方の技術	
小林 由子	29
多文化共生入門ゼミ	
式部 絢子	41
文化の多様性と私たち	
高橋 彩	51
海外の学生と日本語で世界の課題を話し合おうーオンライン協働学習	
鄭 惠先	61
世界の7000の言語と日本語	
平田 未季	69

全体質疑応答

81

著者紹介

95

授業実践報告

札幌を「フィールドワーク」する

青木 麻衣子

わたしが担当する「札幌を『フィールドワーク』する」についてお話します。この授業は、2013年に多文化交流科目が新設されて以後、毎年実施しています。時間割の枠がいいのか、留学生の日本語レベルをゆるく設定しているからか、これまでは結構学生が集まる授業でした。日本人学生は10名の定員をオーバーすると自動的に抽選されるので、10名以上になることはありませんが、それでも毎学期、抽選科目になっています。また、留学生も希望者が多いため、本来定員10名ですが、20名までは受け入れるようにしています。

○授業のながれ

これまでの授業の流れは、次のとおりです。ガイダンスの後、フィールドワークの基礎的スキルを講義およびグループ活動を通して学び、その後教員が指定したグループに分かれて、グループでフィールドワークを進めます。フィールドワークの際の「テーマ」はこちらで設定しますが、「フィールド」の選定はグループでおこないます。

ここ数年は、「現代社会の諸相」をテーマとしています。これまでの例で言うと、「学食での学生のスマホ使用にみるコミュニケーションのあり方の変化」や「札幌の地下歩行空間である『チ・カ・ホ』における交流」、「カフェに見る個別化・個人化」といったような調査がありました。

シラバスにも記載していますが、フィールドワークは各グループで授業時間外に行うため、教室で

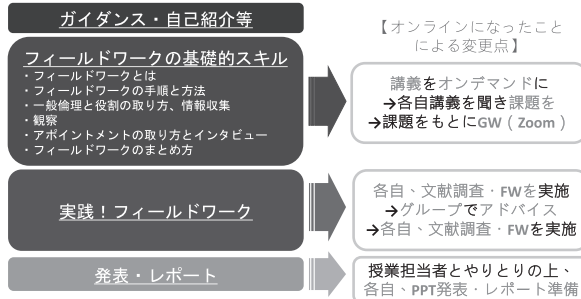
は、1週間の間に行った文献調査の報告やそれらとフィールドワークのすり合わせ等が主な活動になります。3〜5人のグループで行うので、調整は大変ですが、分担が可能なこと、壁にぶつかったときみんなで考えられること等、グループで取り組む利点は少なくないと思います。

○オンライン化に伴う変更

2020年度1学期は、急遽オンラインでの実施になったことから、この後半のフィールドワークの部分のイメージが持てず、開講中止としました。そして、2学期に、全体の計画を見直し、オンラインで提供することにしました。今学期、まだ授業が終わったばかりですが、履修者は、日本人学生が当初10名、留学生が当初12名でした。「当初」と申し上げたのは、留学生の数が、さまざまな理由で、三分の一度にまで激減したからです。学期開始時に自国からアクセスしなければならなかった学生がネットワーク接続の問題でやめ、その後、渡日に伴う準備のための欠席が続いた学生も履修の取り消しを申し出てきました。また、今年度は大学院進学を目指す研究生も多く受け入れていましたが、12月・1月の入試直前になり、ひとりでフィールドワークを行い、その成果をまとめ、発表とレポートを仕上げるのは難しいとドロップアウトしていきました。特に後半は、個別に発表資料の提出を求め、それに対する修正のアドバイスを提供するという方法を取りましたが、それが、特に日本語を母語としない学生にとっては時間と労力のかかる作業だったのかもしれない。

2020年度2学期の実施状況

- ・1学期はオンラインでの実施になったことにより開講せず
- ・当初履修者：日本人学生10名（抽選）＋留学生12名（海外から6名）



授業の構成・内容自体には、オンラインでの実施になっても、大きな変更はありません。

○使用したツール

授業で使用したツールは、主として、ここに示したとおりです。北海道大学には、ELMSという大学が作成・管理するLMSがあるのですが、日本語の授業とのつながりや使いやすさ等を考え、この授業では、Google Classroomを、主に使用することにしました。

前半の講義の配信は、YouTubeで限定公開で行いました。また、学生にはかなり分量が多かったかもしれませんが、交流を軸とする多文化交流科目の性格を考え、オンデマンド教材で基礎的なことを各自学習した後、授業の時間にzoomでグループ活動等行い、その「こたえ合わせ」的なことをして、また各自それをふりかえるという、3段階をとりました。そのため、

使用したツール

- Google Classroom（フォームやシート等も活用）
- Youtube（オンデマンドで動画教材配信）
- Zoom

- ③ふりかえり共有
- ②授業後、ふりかえり記入
- ①オンデマンド教材の配信
（各自学習）
→ワークシート等で確認
→Zoomで授業
（共有・活動）



Google Classroomには、図に示したとおり、1回の講義の内容・活動として、①オンデマンド教材の配信、②Googleフォームによる授業の「ふりかえり」の提出、③「ふりかえり」の共有による学習の総括と教員のコメント、という三つが示されることになります。

後半のフィールドワークでは、オンラインでの実施というよりも、新型コロナウイルス感染症拡大防止および予防の観点から、これまでとは異なり、「個人」で行うこと、対面でのインタビューは極力避けることを、繰り返し学生に確認しました。ただ、だからと言って、わたしがこの授業で常に学生に求めている、フィールドワークの成果、すなわち自分達の「発見」を俯瞰する姿勢・視点から見える「何か」を追求すること、は変更しませんでした。

この点について、少しわかりにくいかもしれませんが、例を出して説明します。先にこれまでの成果として挙げた「カフェに見る個別化・個人化」といった

調査を行ったグループの学生の一人は、よく行くカフェで座席が外向きに、つまり道路に面して置かれていることに、常に疑問を持っていたそうです。そこで、その座席配置から「カフェ」が人々の生活の中でどのような役割を担っているのかを考えてみようと思い付きました。そして、「現代」という時代を背景に考えたとき、「個」・「孤」という概念が、そこに生きる人々にとって非常に大きなウェイトを占めていることに行き着いたわけです。ただ、この「発見」に行き着く道のりや、その「発見」を、それを動かしている「何か」に結びつけて説明することは容易ではありません。

そのため、例年グループでフィールドワークを行い、文献調査等を分担しつつ、教室であれでもない、こうでもないという議論を継続的にしてもらうわけですが、今年度はそれができません。そこで、フィールドワーク自体は個人で行いますが、その成果を共有するためのグループを作成し、Googleシートやzoomでの授業時間の活用により、お互いの進捗を報告しあう機会・時間を確保できるよう心がけました。ただ、最後にみるように、この姿勢・視点自体を、自らの作業だけで理解することは難しく、結果、「フィールドワークが難しかった」という感想も多く聞かれました。

○オンライン授業の効果と課題

最後に、学生の声を紹介したいと思います。まず、オンラインでの実施でよかった点についてです。これは、わたしにとって意外だったのですが、オンデマンドの評価は概してよかったです。特に留学

生にとっては、何度も確認できるという点で、日本語の学習にもなったようです。また、わたし自身は、オンデマンドでの受講、各自のワークシート等の課題への対応、zoomでの授業という流れが、かなり時間をとっているという印象を持っていたのですが、学生からはひとりもそのような声はありませんでした。

一方、やはり、フィールドワークの方法については、課題が多いと感じています。留学生のみならず日本人学生も、近年では、大学に入って初めて札幌で生活をはじめたという学生が少なくありません。特に今年度は、来札の時期が遅れたり、あまり外に出られなかったりという制約のなか、あまり知識のない場所で、しかも個人でフィールドワークを行うのは大変だったかもしれません。また、今年度2学期の月曜日の授業は、12月の最後の授業から1月の最初の授業まで、1ヶ月弱時間が空いてしまうという状況だったため、個人で課題に取り組むのは、時間管理の面でも厳しかったという意見もありました。来学期は、実際にフィールドワークを行う際の人数はコントロールしつつ、つまり「個人」と設定しつつも、その成果はグループでまとめていくというかたちをとることで、多文化交流科目の強みとする、交流が保証できればと考えています。

北海道大学を発見しよう

奥本 素子・朴 炫貞

本授業の目的と目標

(1) 発見：新たな視点から見てみる

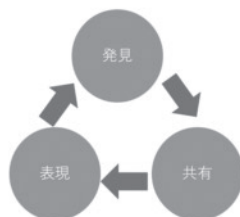
北海道大学の魅力を発見する。

(2) 共有：コミュニケーション的視点

多様な文化をもつ学生同士のグループワークを通して、コミュニケーション能力を身につける。

(3) 表現：プレゼンテーション的視点

北海道大学について発見した情報を、自分達のやり方で可視化する。



この授業は高等教育推進機構オープンエデュケーションセンター科学技術コミュニケーション教育研究部門「CoSTEP」に所属している奥本素子と朴炫貞（パクヒョンジョン）が担当しています。私たちが所属しているCoSTEPは、科学技術コミュニケーション教育の研究をしている部署になります。科学技術コミュニケーションの実践や講義を行なっていますが、特に実践を通して科学技術コミュニケーションに必要な知識とスキルを学べるというのが大きな特徴です。CoSTEPに所属する二人の教員が担当する授業「北海道を発見しよう」は、CoSTEPの良さ、つまり科学技術コミュニケーションを活かせるような授業であるという点がひとつの特徴だと言えます。

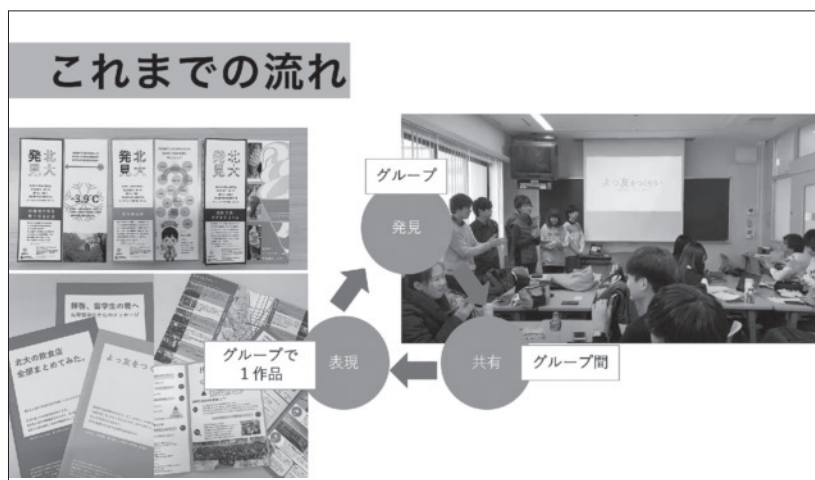
○授業の目的・目標

科学技術コミュニケーション自体は、科学と科学で

はない分野、もしくは科学と社会、大学と社会というような、様々なステークホルダーの人たちをつなげる異文化コミュニケーションでもあります。そういったところで、様々な視点や価値観など、文化を交流するような内容を表現するために、より多様なメディアを活用する表現を学ぶことで、内容を見たり学んだり、また表現を見たりという循環を考えています。ですから、この授業の目的と目標としては、「発見して、共有して、表現する」という三つのサイクルが互いに関係し合いながら、影響し合いながら循環していくことを目指しています。北海道大学に対する経験が浅い学生たちですが、自分たちの新たな視点で北大を見て、その魅力を発見するということを行います。そうして発見した内容を、他の人たちとコミュニケーションをとることで共有していきます。この授業の特徴として、特に表現を大切にしているという点があります。プレゼンテーションによる表現という意味でもそうですが、広い意味でも狭い意味でも「デザイン」を意識して表現し、自分の意見を可視化してみるというプロセスを大切にしています。

○これまでの授業の流れ

今までの授業はこの「発見して、共有して、表現する」というサイクルを全てグループで行ってしました。毎年15名から20名の学生の参加があり、三つか四つぐらいのグループに分かれて、グループ同士のワークにしました。



図に示したチラシ（左）が2018年度と2019年度に作ったそれぞれのリーフレットになります。この一つの授業で三つ、もしくは四つぐらいの成果物ができるといって進めていました。ただ今年度は皆さんご存知のように新型コロナウイルス感染症の影響で、オンラインで実施することになってしまったので、個人で活動することになりました。オンライン授業はzoomを使用して行っています。それぞれ個人で発見したことを共有することで、1人1作品を作るというサイクルにしました。

○オンラインでの提供に際しての工夫

その際に工夫した点としては、「発見する」ということで、それぞれの項目に課題として自主的なワールドワークを入れた点が挙げられます。特に今回は札幌キャンパスに来たことがない留学生の参加もあった

オンライン化における工夫

(1)発見：新たな視点から見てみる

北海道大学の魅力を発見する。

(1)発見：自習によるフィールドワークを取り入れる

フィールドワークを宿題に取り入れる

(2)共有：コミュニケーション的視点

多様な文化をもつ学生同士のグループワークを通して、コミュニケーション能力を身につける。

(2)共有：手紙というメディアの活用

受講生間だけでなく、受講生が具体的な発信相手を想定する仕掛け

(3)表現：プレゼンテーション的視点

北海道大学について発見した情報を、自分達のやり方で可視化する

(3)表現：講義を充実

具体的なデザインに関する講義を増加

ので、中国や台湾、韓国にいる学生がどのように北大を発見できるかというのが課題でした。自分たちが見られる範囲、自分たちが得られる情報の中で、新たな目で北海道大学を発見してみようことを課題にしています。さらにそれを手紙やハガキという、郵送によるメディアを活用することで、コミュニケーションのメッセージだけではなくメディア自体の特徴を理解できるようにしたという点も、工夫のひとつとして挙げられます。もちろん新型コロナウイルス感染症の影響を考慮して郵送という手段を選んだということもあります。また、表現するときのデザインの講義は全てzoomを使ってライブで行いましたが、アートやデザインを専門にした講義を、ライブで質疑しながら進めたというところも工夫のひとつです。

本講義スケジュール

日程	内容	講義タイトル	使用したツール
1 9月29日	ガイダンス		zoom
2 10月6日	リアルガイダンス / 他已紹介 / アイスブレイク		zoom
3 10月13日	北海道大学ってどんな場所？デザインってなニ？	発見 北海道大学を考えよう！	zoom + jamboard
4 10月20日	フィールドワーク 01	-	-
5 10月27日	デザイン講義①+ワーク	発見は、観察から	zoom + google slide
6 11月10日	デザイン講義②+ワーク	観察を分析する	zoom + google slide
7 11月17日	デザイン講義③+ワーク	伝える相手を考える	zoom + google slide
8 11月24日	デザイン講義④+ワーク	伝えるメディアを考える	zoom + google slide
9 12月1日	フィールドワーク 02	-	-
10 12月8日	ハガキイメージ確認	表現 写真で伝えること	zoom + google slide, drive
11 12月15日	ハガキイメージ修正確認、テキスト作成		zoom + google slide
12 12月22日	ハガキ最終確認、印刷データ作成		zoom + google slide
13 1月5日	返信ハガキを持つ		-
14 1月12日	ハガキを展示するプラン作成	発見 展示を目指して	zoom + google slide
15 1月19日	返信ハガキの解釈、デザイン振り廻り		zoom + google slide
16 1月26日	発表・講評・振り廻り		zoom + google slide

○授業スケジュール

授業のスケジュールは、発見して、共有して、表現して、また発見して…と、1時間半の授業1コマの中でもサイクルが回るようになっていて、さらに大きい視点では、授業全体の中でもサイクルが循環するようにしています。ツールとしてはzoom+jamboard、

Googleスライドを適宜混合して利用しました。例えば、フィールドワークの前に北海道大学に対するアイデア出しをみんなで共有することで、他の人や自分が北海道大学に対してどんなイメージを持っているか、自己かつ他者発見ができるよう試みました。また北海道大学だけではなく、「デザイン」という漠然としていて抽象的な概念についてもアイデア出しをし、それを共有することでさらなる発見をする、他者のアイデアを発見する、ということを試みました。さらに、個人で行うフィールドワークは孤独なのですが、自分が

どういうことを発見したのかを共有することで自分が知らなかったことの発見や、他の人の発見から影響を受けてさらなるフィールドワークに繋がったということもあります。

発見するとき、写真撮影がとても大切で、写真をどういうふうに撮るかによってメッセージ自体が変わったり、効果的な伝え方ができたりします。これは訓練しながら学んでいく要素もあるので、自分ひとりでするだけではなく、他の人の例を見ながら学ぶという要素も大きかったのではないかと思います。また、たくさん写真を撮ってもらったのですが、様々な角度で撮った写真の中から1枚を選んでほしい、そこに言葉を選んでレイアウトするという作業も全て共同作業にしています。これは「共有する」「表現する」というところの循環の試みです。その写真は最終的に印刷業者に頼んでハガキを作ります。これが最初のアウトプットになりますが、作るだけで終わらず、そのハガキを送ってみる、また、その返事をもらうという、さらなるコミュニケーションを経験させるということを試みました。ハガキでのコミュニケーションは、実際に特定の相手がいるわけです。どんな相手に送るかによってメッセージや作り方が変わるということも体験できたし、受講生同士だけではなく、受講生からさらに学外の人たちへと北海道大学を共有できるというツールを設けました。

○学生がこの授業を通して学んだこと

これは最後の授業で振り返りとして行なったワークの結果ですが、授業を通して何を学んだかを一

この授業を通して、

- 「コミュニケーションという言葉一つとっても様々な手段があり、媒体によって伝わり方が全く違うということ」
- 「デザインの工夫によって届けたいことが相手により伝わること」
- 「正解のない問いに対して真剣に取り組むこと」
- 「デザインが持つ意味の大きさ」
- 「自分の足で歩いて被写体を探す大切さ」
- 「デザインを使ったコミュニケーションの方法」
- 「自分が伝えたいことを強調するためのデザインの難しさ」
- 「ハガキにしてメッセージを伝えることの手間と温かみ」
- 「写真に合う言葉が持つ意味の大きさ」
- 「些細なものを使っても、撮影したモチーフを追加すれば、意味がある写真になること」
- 「改めて学びには切りがない」
- 「人とのつながりはオンラインだけじゃないこと」
- 「人々はどんな目で北大を見るか」

を学びました。

言で書いてもらったものです。いろいろな切り口があったようですが、デザイン自体に対する発見だけではなく、そのデザインで使った写真や言葉、さらに「伝える」ということやコミュニケーションに対して深く考えられたという意見が見られるかと思っています。

この授業で目指していたのは授業の中の三つのサイクルの循環ですが、それがさらにこの授業から北大の外へと広がることによって、コミュニケーションの機会を増やし、さらなる「発見」と「共有」と「表現」ができることを目指しました。やはりコミュニケーションションするときには自分のメッセージをどのように作るのかが大切なので、自分が発見したものをどのように表現して共有するのを考えて行えたのではないかと思います。こういった中で、さらにこれからもこのような発見が続いていけばいいなと思っています。

この発表で紹介した授業の様子はCoSTEPのwebサイトでもオンライン講義として共有されていますので、

興味がある方はぜひご覧ください。

○「ハガキ」を選んだ理由―フロアからの質問への回答

ハガキを選んだ理由としてですが、やはりみなさん、特に学部1年生のほとんどは、「切手を貼ってハガキをポストに入れる」という経験が今回初めてだったようですね。ハガキというのは古いメディアなのですが、今の若い世代にはかえって古いメディアのほうが新しいのかなと思いました。ですから、その体験をしてみることで、選択肢の幅が広がるのではないかというのが理由の一つです。また、あえてコミュニケーションに時間をかけるという体験も大切だと思います。すぐ送ったり送り返してもらえたりするような、LINEなどのデジタルなメディアだけではなく、1個のメッセージを伝えるのに、非常に時間や手間がかかる方法を使うことで、メッセージの重みが変わるという体験をぜひ一緒にしたかったということがあります。送り先は、学生のご両親や友達、おばあちゃん、海外に住んでいる友達など様々でしたが、学生がそれぞれ送りたい人を設定しています。教員が、まず印刷されたハガキを学生の手元に郵送し、そのハガキの中から自分がつくったものを、自分が送りたい相手に送る、という手順です。その写真を私がもらったという形になっています。

考え方の技術

小林 由子

○授業の目的

みなさんは、「考え方の技術」って何？と思われるのではないのでしょうか。一言でいうと、この授業では、メタ認知能力を身につけることを主な目的にしています。この「考え方の技術」では、メタ認知能力の中でも特に「批判的思考」に着目し、多様な視点からものごとを考えられるようになることを目的としています。考えたことはコミュニケーションを通じて他者に伝える必要がありますので、あわせて、日本語での表現技能を向上させることも目指しています。ディスカッションをしたり、レポートを書いたり、その他の手段によって自分の考えを表現して、他者の意見も傾聴できるようにすることも目標です。

○授業の方法

次に、授業の方法について、その概要を説明します。授業は、オンデマンド授業ではなく、zoomによるリアルタイム授業として行いました。また、あわせて、課題の管理やリソースの共有にGoogle Classroomを使用しました。

授業のおおまかな流れですが、受講者はまず授業前に、前の授業で提示された事前課題を提出します。授業では、それを使いながらその時間のトピックについて教員が説明し、ブレイクアウトルーム

を使ってグループでディスカッションをしてもらい、その結果を全体で共有します。グループワークは、1回の授業当たり、おおむね1回か2回です。メンバーは1グループ3〜4名で、日本人と留学生が混在しています。メンバーは学生からの要望もあり、なるべく変えるようにしました。必要があれば、その後さらに補足的な講義をくわえます。

授業のあと、学生は、必ず期日までに課題をGoogle Classroomにアップします。内容は予習的なものとまとめ的なものがあるのですが、どちらの場合も授業の感想を書いてもらい、感想を書くということも成績の一部に含まれます。教員は、授業のあと、Google Classroomに、授業のスライド、グループワークのまとめ、授業で紹介した参考リンク、授業の録画をアップします。

○評価の方法

評価は、事前準備とグループ参加が20%、授業後の課題が40%、最終レポートが40%です。事前準備は、事前課題として出してもらった予習に相当するもので評価をしています。グループワークに関しては、ブレイクアウトルームを巡回して参加度を見たり、交代で行うまとめ発表を見たりしていますが、比重はあまり高くありません。授業後の課題というのは、例えばフェイクニュースについてなど、一つのセクションが終わったあと、まとめとして出してもらうものです。最終レポートについては、授業の一部として、「レポートの書き方」を扱っています。テーマは自分で自由に設定してもよ

いし、こちらからお題を指定したものから選んでもらってもかまわないことにしています。提出の2週間前ぐらいにテーマとアウトラインを提出してもらいます。だいたいテーマの設定でつまづくので、授業の一部として、zoomで個別に面談を行い、内容や構成についてフィードバックを個人的に行いました。その後、期限までに最終レポートをGoogle Classroomにアップしてもらいます。

○受講者の概要

受講生についてですが、この授業は、全学教育の「一般教育演習」も兼ねているので、定員は一応23名です。しかし、人数については担当者の裁量に任されているので、このクラスでは最大30名ぐらゐまで入れることにしています。日本人学生は12名と人数が決まっており、抽選で決定します。留学生は、そのときどきで変わりますが、このクラスは日本語レベルが中級以上であれば受けられることにしています。

2020年度後期の受講生の内訳は、日本人学生が12名、留学生が15名の合計27名です。

日本人学生は、1年生10名、3・4年生が各1名で、全員が札幌在住です。2020年度前期は他の授業がすべてオンラインだったためか道外に在住する1年生が多く、7月の外国語統一試験のあと全員が札幌在住となりました。

留学生は、プレイスメントテストで日本語が中級レベル以上と判断された15名です。内訳は、現代

日本学プログラム学生1名、研究生8名、日本語・日本文化研修生6名です。

現代日本学プログラムというのは、留学生に特化した学部プログラムで、後期開始時には、留学生で日本にいたのはこの1名だけでした。日本語・日本文化研修生は通称「日研生」と呼ばれています。が、海外で日本語を専攻する学部生が半年から1年日本で研修するプログラムです。「コロナ」のため、学期開始時は日本に来られず、12月ごろに来日しました。国のネット環境が悪く、この6名以外に2名が履修を断念しています。研究生はほぼ全員が中国か台湾からの受講です。この8名のうち、おそらく大学院受験のためだと思いますが2名が脱落しました。しかし、例年ですと研究生は途中でほぼいなくなるので、残留率は2020年後期がもっとも高かったことになります。

受講動機は、例年同じなのですが、日本人学生・留学生とも「交流したい」が最も多くなっています。授業後の評価では、日本人学生からは、留学生と話すことにより新しい視点を得た、他の授業では話すことはないので授業で話せてよかった、留学生や自分の日本語使用への気づきがあった、という声が聞かれました。留学生からは、実際に日本人と日本語で話すことができた、日本語でディスカッションしたり、内容をまとめたりできてよかったという意見が多く出しました。

○オンライン授業における課題

「オンライン授業の問題」は二つに大別されます。ひとつは、COVID-19感染拡大によるもの、も

うひとつは、対面授業ではなくオンライン授業であることです。まず、一つ目の「コロナ」による問題に関して、今回最も大きかったのは、日本への渡航制限のために、海外から参加する留学生が多かったということです。

日本で英語を学んだ日本人学生が、いきなり欧米の大学のオンライン授業に参加するという例を考えていただくとわかりやすいと思いますが、この授業は「日本語レベルが中級以上」と日本語レベルがやや低い学生も受け入れているので、プレイスメントテストでは中級の得点で受講が許可されたにもかかわらず、日本語でのコミュニケーションにはかなり難がある留学生が多く見られました。そのため、日本人とのグループワークでもお互いの意思確認に時間をとられることがあり、授業時間に影響を及ぼすことになりました。

また、国によつては時差があり、さらに、ネット環境が悪く受講を断念するケースがありました。ブラジルの学生がいて朝4時からがんばって受けてくれたのですが、この学生は幸い途中で渡日することができ、受講を続けることができました。

予想外だったのは、大学図書館の利用に制約があったことです。例年ですと、図書館の資料を使うよう指導するのですが、年度当初は図書館が閉館し、その後開館したものの、前期は日本人学生が札幌におらず、後期は留学生が海外からということ、利用できないケースがありました。インターネットによる情報収集については個人面談で対応しましたが、授業に取り入れるべきであったと考えています。

対面授業ではなくオンライン授業になったことでの問題で、もともと大きかったのは、端的に言う
と、時間が足りなくなったことです。理由のひとつとしては、対面授業では空間を共有していること
でノンバーバルなコミュニケーションができるのに対し、オンライン授業では空間を共有していない
ので、伝わる情報量が少なくなり、言語への依存度が高くならざるをえなかったことがあります。そ
のため、海外から履修していて教室外で日本語を使った経験がほとんどない中級レベルの学生への対
応が問題になりました。特に、私の授業では、ともすると内容が抽象的になってしまっているので、いかに
授業内容の抽象度を下げ具体化し日本人と話しやすくするかということが、非常に大きな問題でした。
また、技術的な問題として、授業ごとになるべく違う学生を組み合わせるためグループ設定を手動
でしたのですが、これを授業時間内にしなければならず、ここでも時間的ロスが生まれました。

今回、オンライン授業をしてみて初めて気がついたのですが、対面授業とオンライン授業の大きな
違いは「偶然」がありうるかどうかということではないかと思われれます。対面授業だと、たとえば他
のグループの話が聞こえて影響し合うなど「偶然」がありますが、オンライン授業では「偶然」の要
素がきわめて低いので「しかけ」「しくみ」を全て設計する必要があります。これは今後の大きな課
題です。

○オンライン授業にあたっての工夫

授業で留意した点は、授業内での教師と学生、学生と学生のコミュニケーションをいかに確保するかということです。今回は、学生と教師の間のコミュニケーション手段としてZoomによる個別面談を行いました。これは、2コマ休講にせざるをえなかったための代替措置でもあったのですが、指導上の効果はあったと思います。しかし、2コマ分だと180分なのですが、1人当たり15分から30分行ったので、実際には4コマ分以上の時間を使用しました。

また、先ほど述べたように、授業内で必ず1回か2回、ブレイクアウトルームによるグループワークを設けました。グループでの討議内容については、グループ内でメモを画面共有してもらい、あとでアップしてもらいました。また、クラス全体への報告については、教員が画面共有をしながらまとめを行い、授業後にGoogle Classroomにアップしました。

はじめにお話をしましたように、この「考え方の技術」では「批判的思考力」を養うことを目的としています。「批判的思考力」は、ジェネリックスキルとして大学で養成を期待されている力ですが、教育アプローチとしては、大きく分けて三つほどあります。私は心理学を専門としているため、心理学的なアプローチを採用しています。

図1は、楠見・道田(2015)から転載した、メタ認知としての批判的思考力の概念図です。

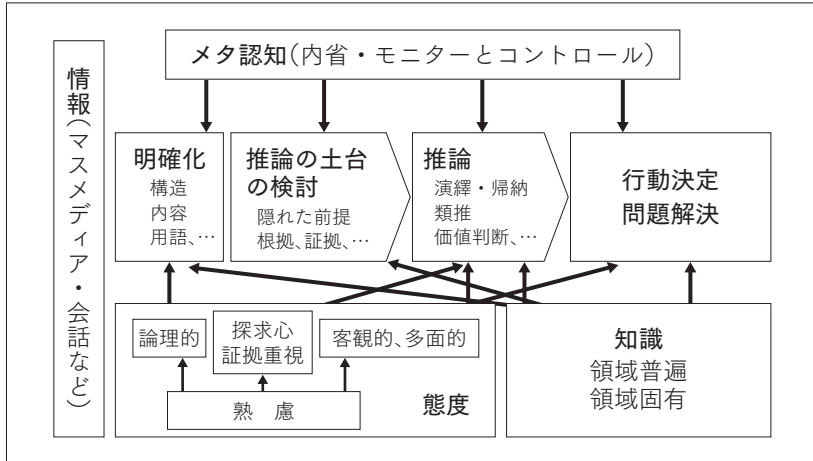


図1 メタ認知としての批判的思考（楠見・道田 2015）

我々は、メディアなどから情報を得て行動するわけですが、たとえば、「コロナ」についてのフェイクニュースを何も考えずに信じるのはまずいわけです。そこで、そのニュースがどんなメディアによるものか、バイアスがかかっていないかなど、いろいろな面から考えてみる。そのときに、フェイクニュースやメディアリテラシーや認知バイアスなどの知識をメタ認知的知識として働かせることができると、より適切な行動がとれる。フェイクニュースを例にざっくり説明すると、そのようなことになります。

課題となるのは、日本語レベルが中級以上の留学生と非母語話者の日本語に慣れていない日本人学生が、日本語でコミュニケーションを取りながら協働できるようにするために、いかに内容を抽象的なものから具体化するか、ということです。

そこで、授業をオンライン化するにあたり、授業内容に図2のような変更を加えました。対面授業のとき

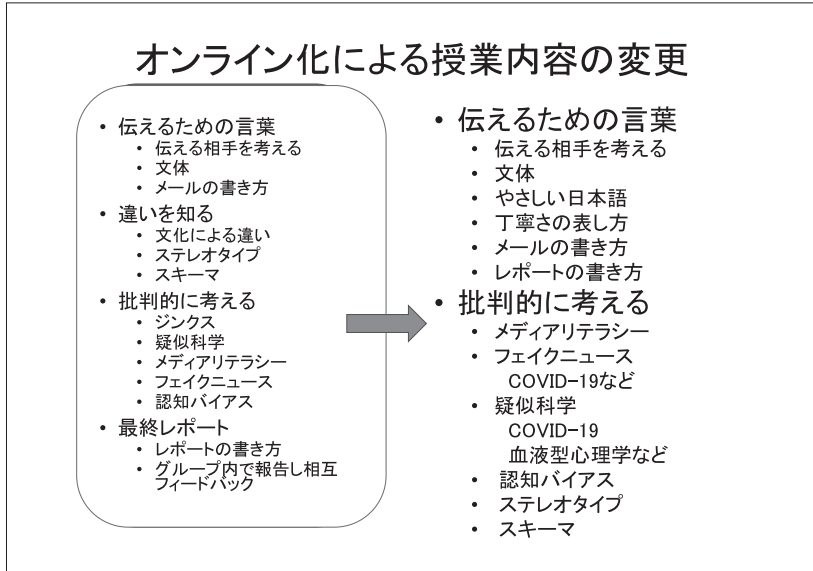


図2 オンライン化による授業内容の変更

○授業のオンライン化の功罪

今回は4パートに分けて行っていたのですが、内容を大幅に整理し、言葉のパートと批判的に考えるパートの2パートに分け、言葉の部分の比重を増やしました。

変更の背景となっているのは、授業が対面ではなくオンラインになったこと、先ほども申し上げたように、オンライン化により時間を要するようになったこと、海外在住で日本語での実際のコミュニケーション経験がない留学生が増えたことです。

今回、「コロナ」によって授業が対面からオンラインになったわけですが、このオンライン化には、良かった点と良くなかった点があるかと思います。良かった点としては、ま

ず、授業をオンライン化するにあたり、授業内容の精査や授業方法の再考ができたことがあります。また、教員としては、授業のための新しいツールを発見できたというのも収穫でした。学生側から見ると、特に日本人学生の日本語使用についての気づきがいともより多かったように思われます。さらに、これは学内外で耳にするのですが、最終レポートの質が向上したように思います。一方、良くなかった点としては、先ほども述べたように、授業の中で「偶然」が生じにくいこと、授業の情報量が少なくなってしまったことがあります。また、今回は、海外に在住しており教室でしか日本語に触れる機会がなかった、比較的日本語力が低い留学生の授業の理解が不十分だったのではないかという危惧があります。

○今後の課題

今後の課題としては、図3に示したような精査・改善を行っていきたいと思います。実は、私は前期はGoogle Classroomが使えなかったのですが、教員として、オンライン授業ツールの技能に習熟する必要があると思います。今後も新しいツールを活用して授業を改善していければと思います。

今後の課題

- 授業内容の精査・改善
 - 日本語が中級レベルで渡日経験がない（日本語クラス以外での日本語使用経験がない）留学生に対し、いかに抽象度を下げ、具体的に、日本語で「批判的思考」を学べるようにするか
 - そのためのトピックの精選と提示方法の改善
- 授業方法の精査・改善
 - 特に、授業内でのコミュニケーション推進の工夫
- 授業開始前の学生に対する（質問紙）調査
 - 特に、留学生の日本語使用経験・日本国外在住か等の受講環境の事前把握
- 教員のオンライン授業ツール利用技能習熟

図3 今後の課題

参考文献

- ・ 菊池聡（2012）『なぜ疑似科学を信じるのか 思い込みが生み出すニセの科学』化学同人
- ・ 楠見孝・子安増生・道田泰司（編）（2011）『批判的思考力を育む 学士力と社会人力の基盤形成』有斐閣
- ・ 楠見孝・道田泰司（編）（2015）『批判的思考 21世紀を生きぬくりテラシーの基盤』新曜社
- ・ 笹原和俊（2018）『フェイクニュースを科学する…拡散するデマ、陰謀論、プロパガンダのしくみ』化学同人
- ・ 鈴木宏昭（2020）『認知バイアス心に潜むふしぎな働き』講談社ブルーバックス

多文化共生入門ゼミ

式部 絢子

授業の概要「多文化共生入門ゼミ」

① 授業計画	
1	5月18日 オリエンテーション
第1部 視点1 「多文化」を感じる	
2	5月22日 “ひとくくりは悪い!” “マイノリティ・セグメンテーション”
3	5月29日 心が広がっていくということ
4	6月5日 デザイン・コミュニケーション
第2部 視点2 「難民」を感じる	
5	6月12日 難民を知る、感じる ワークショップ
6	6月19日 難民を知る、感じる ギャラリーセッション 部連 山口 浩志、山下 智恵子
第3部 視点3 「クマとの共生」を考える	
7	6月26日 「クマと共生(主編)」ドキュメンタリー公開
8	7月3日 「クマと共生(主編)」解説
9	7月10日 野生動物との共生 ギャラリーセッション ハンター 野中 崇志
第4部 実践! 考える→出す→伝える	
10	7月17日 中間報告会 (視点1・2・3の振り返り)
11	7月24日 グループワークセッション 発表準備
12	7月31日 グループワークセッション 発表準備
13	8月7日 グループワークセッション 発表準備
14	8月14日 グループワークセッション オンライン開催
15	8月21日 グループワークセッション オンライン開催

▶ 第1部～第3部

外国人・難民・クマ

→異なる背景、共に生きる

ワークショップ形式

▶ 第4部

オンラインワークショップ開催

この科目は、多文化共生を多様な視点や立場で考えて、「共生」の意味や、そこに必要な点について考え、自分の言葉で説明できるということを目標に行った授業です。授業は4部に分けました。第1部から第3部では、それぞれ「外国人」「難民」「クマ（野生動物）」をテーマに、異なる背景の人や動物と共に生きるためにはどうしたらいいのか、どんな考え方が必要なのかを、グループワークなどを通して考えました。そして最後の第4部では、1部から3部で学んだことを、誰かに「伝える」ためのオンラインワークショップを企画・運営してもらいました。

○授業のながれ

第1部から第3部はこのような流れで進めました。教員からテーマについて解説したあと、必ずグループでワークやディスカッションを行います。第4部では

知ろう! 話そう!

多文化? 共生?

オンラインワークショップ

北海道大学 多文化交流科目「多文化共生入門ゼミ」 プレゼンツ

場所: Zoom
参加費: ¥0
使用言語: 日本語
定員: 各日10名
〆切: 1月15日

身近な人との共生、難民との共生、動物との共生…
学生が学んだことを参加者のみなさまに
楽しくお伝えしながら、「共生」のポイントを一緒に探ります!
申し込み先&質問:
<https://forms.gle/J4WLvGGiwTs4KNie9>



1/22(金)

17:00-18:00 1・4・3 同時開催

1 国境を越え、民族を越えて

生活の中で外国人と共生する機会が増えている今日、日々外国人が抱える様々なトラブルについて知っていますか? 私たちと一緒に多文化共生について考え、その在り方を模索していきましょう!!

身近な多文化チーム1:
イクヒ・ユウヤ・リソゲン・タンヨウ



1/29(金)

17:00-18:00 6・2・5 同時開催

6 クマと共生するってDo you know?

クマと人間は共生できる?
ハンターはクマを殺してもいいの? クマの生態知ってる? 私たちと一緒に、人間とクマの共生の話やハンターの立ち位置などについてシェアしましょう!

クマチーム6: セキ・ユメナ・ユータロー・ルイス



4 デンジャラス・プーさん

皆さんはクマを怖いと思いますか? それとも可愛いと思いますか? 日本ではクマとヒトとの関係が問題になっています。私たちと一緒にこれについて考えていきましょう。

クマチーム4: アイ・サラ・ユースケ



2 ひとつの世界、ひとつの夢

みなさん、日常生活では外国人の方とのやりとりが多いですか? 異文化環境にいるあなたは、時々カルチャーショックを感じますか? 特に心当たりのことがありますか? 本ワークショップで異なる文化背景の人と一緒に考えてみましょう。ぜひご参加ください!

身近な多文化チーム2: タオ・リョーサー・ショウギ



3 難民の立場に立って考えましょう

自分が難民になったとして、どのように生きていこうか考えます。そして難民政策を深く知りたい。難民との共生は一体どのようなものでしょう? そのために必要なことは何でしょうか?

難民チーム3: ハルカ・ミフユ・チン・リナ



5 森のクマさん

“ある日♪森の中クマさんに♪出会った♪”
ら、あなたはどうしますか。クマさんと共に歌い、踊ることができそうですか。そんな未来を私たちと一緒に考え想像してみましょう。

クマチーム5: ユタカ・イ・レオ



図1

授業の概要

▶ 第1部—第3部 講義＜ワークショップ形式＞

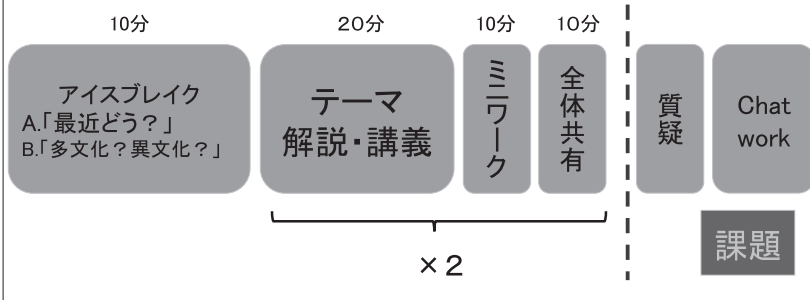


図1に示したチラシを作成し、ワークショップを開催してもらいました。

○履修学生について

次に履修学生についてですが、1学期は17名（留学生7名、日本人学生10名）、2学期は21名（留学生11名、日本人学生10名）という構成です。日本人学生の所属は農学部、医学部、獣医学部、文学部など、多岐に渡ります。1年生が多かったように思います。留学生は、短期留学生や大学院生、また2学期は、研究生が多かったです。

○オンラインでの授業提供に際しての変更点

次にオンラインでの実施について、授業内容についてはこれまでとほとんど変更していませんが、技術的

な変更点が大きく二つあります。一つ目はコミュニケーション上の工夫で、メール以外にchatworkというアプリを使いました。これは学生とメール以外でコミュニケーションを気軽に取れるツールです。LINEのようなアプリだと思ってください。もともとはzoomの授業で、途中でwifiが切れてしまったときなどに私の手元のスマートフォンで対応するためのものとして準備しました。LINEと似たようなものなので、学生同士が活用しやすく、ちょっとした雑談など、教室のガヤガヤした感じが出せればという期待もありましたが、基本的には連絡用という位置付けで使用しました。

二つ目はワークショップの実施形態の変更です。ワークショップは「自分たちの学びを教室の外へ開く」ということを目的の一つとしています。1学期は北大の北図書館のオープンスペースで一般学生に向けたワークショップの開催、2学期は毎年1回行われる北海道国際協力フェスタのイベントに出展し一般の方に向けたワークショップの開催を考えていましたが、この情勢のためにどちらもオンラインでのワークショップとしました。

○オンライン授業の効果

次にオンライン授業における効果と課題についてご報告します。まず良かったのは、chatworkというアプリが連絡用以外にも効果的に機能した点が挙げられます。ここで学びの振り返りをしたり、質問や意見交換をしたり、またちょっと脱線したおしゃべりがあったりと、学びが広がった点良かった

です。さらに、会話が消えずにLINEのようにどんどん溜まっていくので、学習記録としても機能したようです。レポートを書く際に振り返りながら書くことができるなど、記録としての作用もあった点が予想外に良かったです。はじめは連絡用としか捉えていなかったのですが、活用できるものだという気づきがありました。

次に量より質という点です。オンライン授業では、対面するときよりも「伝わっているかどうか」がわかりにくいため、話すスピードを落とすなどの対処が必要になります。そのため、当初予定していた量の内容ができなかったので、思い切って内容の分量を減らしました。しかし、逆に量を減らしたことで、何を学生に伝えたいか、何を考えて欲しいかということ、つまり、自分がこの授業で何をやりたいのかという当たり前のことに立ち返ることができました。これは授業担当者として良い点だったと捉えています。

また、コミュニケーションの工夫という点ですが、やはり留学直後の留学生にとって、いきなりのzoom授業は、自国で日本語を学んでいたとしても慣れないようでした。ですから、そういった学生に対しては録画しておいた授業のビデオをYouTubeにアップして、あとから繰り返し見られるよう配慮しました。こういった対応ができるのはオンラインならではの点だと思います。

次に、ブレイクアウトルームとフィードバックについてですが、ブレイクアウトルームでグループディスカッションしている際、そこに教員が入って様子を見るのですが、雑音がないせいか、対面時よりもじっくりできたような印象があります。グループ設定も3〜4名と少人数にしていたので、学

生も発言しやすかったのではないかと思います。

最後にソトとつなぎやすいという点ですが、外部のゲストスピーカーが呼びやすいということがあります。対面時でもskypeを利用してゲストを呼ぶ、ということは行っていたのですが、zoomはskypeに比べて安定性が高く、また、先方も知ったツールだったので気軽に使うことができました。以上がオンラインの実施で良かったと考えている点です。

○オンライン授業の課題

次にオンラインで実施する授業の課題です。まず、グループディスカッションの様子が対面時に比べわかりにくいということがありました。対面の教室内では指示の確認などのこまごまとした雑談ができたり、他のグループの取り組みの様子を見るなどできたりするのですが、オンライン授業ではそれができません。したがって、たまに指示とは全く違うことをしてしまう学生が出てしまうことがあります。そういった点は工夫できることを見つけていきたいです。

それから、私も学生も何かとオンラインのせいにしてしまいがちだったかと思います。わからないことは本当にオンラインのせいなのか、うまくコミュニケーションできないのは本当にオンラインのせいなのか、考えさせられました。

次に、オンライン授業において、また、国際必修科目にとって何が課題なのか、私自身まだ測り

かねているところです。例えば、今回行ったオンライン授業は、対面授業の代わりとしてはまあまあじゃないかなという自己評価をしているのですが、「対面の代替」でいいのか、という問題があります。今後もしwithコロナの時代が続いていくことが予想されますが、その状況の中で「オンラインならでは」の価値を探索していくとしたら、それは非常に技術的な問題に偏ってしまうのではないかと考えています。本シンポジウムの目的でもあると思いますが、「国際教育交流を充実させる」という視点に立つと、また違った課題が出てきます。これらの課題が一つに集約されるわけではないのですが、それぞれの課題がどのように関連していくのか、何が技術的なことで何が教育的なことなのか、また、授業担当者としてどこに注力すべきかといったことを整理したいと思っていますし、この組織の中でも共有されていくことが必要ではないかと考えています。

最後になりますが、国際教育交流の充実という観点から見ると、オンラインの利点が多く活かせるのではないかと考えています。先ほど申し上げたように、zoomの利用者は多く、リモートに慣れている人も増えているので、もっとスムーズに、気軽に他地域に学びを開いていくチャンスが増えるのではないかと思います。例えば北大であれば、他の大学の協定校とセッションをするとか、また、大学以外にも学外の様々な団体や地域の人とつながることができると思います。教室外と気軽につながるができるオンラインという形態は、教室の学びが深まるチャンスだと私は捉えています。さらに日本に来る前の留学生、また逆に日本から国外へ留学に行く学生にとっても、オンラインで留学前、そして留学中、留学後とつながっておけば、持続性を持ったキャリア形成ができるのではないかと期

待しています。

参考文献

- ・倉八順子（2016）『対話で育む多文化共生入門―ちがいを楽しみ、ともに生きる社会をめざして』明石書店
- ・池田理知子・埴 幸枝編著（2019）『グローバル社会における異文化コミュニケーション 身近な「異」から考える』三修社

授業協力

- ・山下芳香氏（特定非営利活動法人 国連UNECR協会北海道エリアマネージャー）
- ・野田奈未氏（北海道猟友会森支部）

文化の多様性と私たち

高橋 彩

私は国際交流を通じた学びをテーマに、多文化交流科目で授業をしています。もともと私自身、オンライン授業やICTについて、優れた知識やスキルを持つ者ではありません。ですから、このシンポジウムのお話を頂いたとき、とても皆様にご紹介できることはないと考えました。しかし、ICT活用に長けているわけではない一教員が、オンライン授業にいかに対応したか、そこから何を得たかをお話しすることで、皆様の参考にしていただければと思っています。

「文化の多様性と私たち」は、2020年第1学期に新規開講した授業です。多文化交流科目についてはその前年度まで別のテーマで行なっておりましたが、それを閉じて、新しく開講計画を立ててシラバスを書いた矢先に新型コロナウイルス感染症拡大によるオンライン授業となりました。授業は15回全てオンラインのみで行なっています。

○授業の内容とオンライン化に伴う変更点

この授業は、多様な人々との共生について考え、対応する力を養うことを主眼に、文化、コミュニケーション、ことば、あるいは異文化やボーダー（国境）といったことについて、実践や作業を通して考えていくものです。授業ではこういった深遠なテーマについて、テキストの読解、自らの意見の表明、文章化、口頭での表現、他の人々との対話、主張をチームでまとめて報告するといった活動を通してその力を養っていきます。教科書（テキスト）¹を使うことにしました。評価はレポートや報告

授業の概要

授業の目標

- ・多様な人々との共生について考え、対応する力を培うための入門的授業です。毎回、一つのテーマについて討論し、文化やコミュニケーション、ことば、多文化主義などについて考えることを通して、多様性を尊重する社会で求められる考え方や姿勢を具体的かつ実践的に養います。

到達目標

- ① 多様性に関する各テーマについて、自らの意見を文章あるいは口頭で表現することができる。
- ② 多様な人々とのコミュニケーションを実践できる。
- ③ グループの主張をまとめて発表するプロジェクトを他者と協働して遂行できる。

テキスト・評価

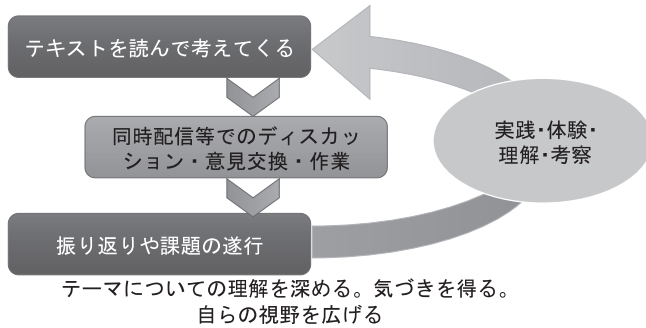
- ・テキスト使用：池田理知子・塙幸枝編著『グローバル社会における異文化コミュニケーション―身近な「異」から考える』三修社、2019
- ・レポート、グループ発表、授業への貢献

などで行ないました。これはオンライン化以前に計画していたことです。

オンライン化でまず決断したのは、双方向同時配信を中心にすることです。この授業は交流を主眼とし、コミュニケーションの多様性と多層性を土台としていましたので、完全オンデマンドでは授業目標の達成は難しいと考えました。そこで、同時配信ではブレイクアウトセッションによるグループワークを中心にしました。予定に1回入っていた見学は中止としています。

学生も私も、この未曾有の状況下で初めての経験なので、学生には助けてもらおう、協働してもらおうという構えではじめました。当時は毎回の授業をしっかりと届けるために、私がアプリケーションを問題なく操作できるのか、大変不安だったことを覚えています。しかしまずは自分の能力を直視して、頑張りすぎずに言う、やってみなければわからないことも多い、とい

学習のサイクル



う考えを基本線にしました。

○授業における学習のサイクル

オンライン授業は、基本的には同時配信授業と、文字による感想やコメント、振り返りの活動などで構成されています。北海道大学ではELMSというシステムを利用していますが、そのシステムを使った学習と同時配信授業で組み立てました。今回初めてテキストを使うことを計画していたのですが、それが功を奏したというか、偶然、オンライン化において救いとなりました。ちょうど反転授業のように、事前に教科書の指定した章を読んでもらい、同時配信でそのポイントを簡単におさらいします。必要に応じて追加の知識や情報の提供もしました。その上で、各回のテーマについて、グループでのディスカッションや意見交換をしてもらいました。

話す内容は、例えば、オンライン会議でのコミュニケーションのメリットや限界について考えてもらったり、それぞれの国や地域のメモリアルデーや有名な展示・資料館について情報交換をしたり、「なぜ英語を勉強しているのか」について意見交換する、などです²⁾。

授業では、コミュニケーションには注意をしました。学生も不安を抱えながら授業に臨んでいるというところ、しかし真摯に取り組んでくれているという前提で考えました。デジタルのみという、コミュニケーション手段が大変限られている中で信頼関係を作るには、まず私が相手を信頼し、相手の目線で語ろうとしなければ関係を築くことはできないと考えたからです。

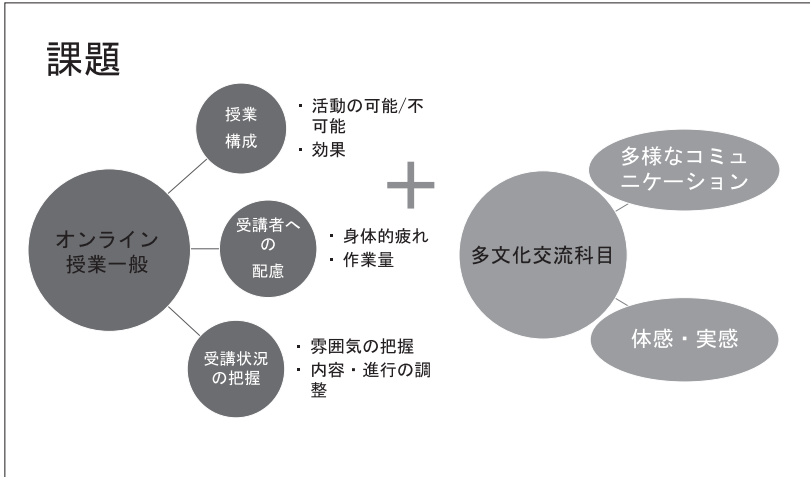
○オンライン化による効果と課題

オンライン化でよかった点は、学習面では、学生がしっかりと読み、論点を考えた上で授業に参加することができたのではないかとこの点です。また、コミュニケーションツールが増えて新たな学習活動の方法を獲得・拡大できたのではないかと思います。ELMSを通じて振り返りがしやすかったことも挙げられます。授業の半分くらいの回で振り返りを書いてもらったのですが、それには私からできるだけ、全体には同時配信時、あるいは個別に文章でレスポンス、簡単なフィードバックをしました。

課題と感じたことは、まず、オンライン授業一般について言えることですが、毎回の授業の細部構

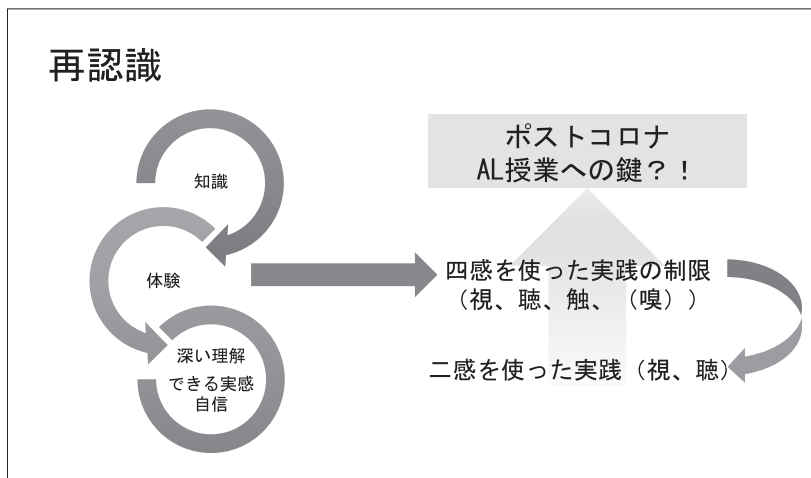
成を考え直す際、画面上のやり取りしかできないことを前提に活動を組み立てなければならなかったということでした。いつも使っていたリアルな模造紙や付箋、可動式ホワイトボードやマーカーは使えません。このことから、私たちがいかに身体的に動く活動を前提にリアルな教室を使い、その空間の恩恵を享受していたかということを痛感しました。

また、オンラインでは受講者が心身面でどのくらい疲れるのかを配慮する必要がありました。自分の授業で十分な学習をしてもらうということはもちろんですが、学生はこれ以外にも多くの授業をとっているだろうということを考えて、個人の学習総量を考慮する重要性を、「コロナ」以前よりも強く感じました。さらに、オンライン授業では受講者の理解度や授業への姿勢を把握することが難しいので、これまでリアルな教室で、自分がいかにそれを感覚的に察知しながら授業をしていたかということがわかりました。特に多文化交流科目の私の授業では、体感的なコミュニケーションが難しいこと、交流においてスタートとなる「異なること」や「共通のこと」への実感を促す活動が難しいということがわかりました。例えば、文化やシチュエーションによる相手との距離の取り方を認識するペアワークは行うことができませんでした。このようなことを通して、特に「体感的」ということがいかにこの授業にとって重要であるかということを、わかっていたはずではありませんが、「あらためて実感した」というのが私の感想です。



○ポストコロナ時代の交流授業に向けて

最後に、この授業では、リアルな教室で人間の五感、つまり視覚、聴覚、触覚、嗅覚、味覚ですが、そのうちの三感（または「場の空気」ということから考えると四感）を当然のものとして取り込んで、そこから深い理解や実感を促していました（ということを再認識しました）。特にグループワークなどでは、その場での振る舞い、つまり身体を動かして、テーブルを使って、付箋を利用しながら、というような活動ですが、こういった経験を重視していました。ところがオンライン化は、「視る」「聴く」という二感を使った授業を中心に組み立てなければならないことを意味しています。その限られた条件下で、この授業の場合、経験、あるいは体験をどう扱っていくかが最大のポイントであるということであらためて考えた次第です。ポストコロナ時代の効果的なアクティブラーニングを考える



とき、この「体験」をいかに構成できるかが、その鍵になるだろうということが、私がこの授業を通して得た教訓です。

註

¹ 池田理知子・塙幸枝編著(2019)『グローバル社会における異文化コミュニケーション―身近な「異」から考える』三修社、をテキストとして採用させていただいた。

² トピックは、テキストで「ディスカッションのために」として提示されているものや、それを日本人学生と留学生の共修向けにアレンジ、あるいは独自に設定した。

参考文献

- ・池田理知子・埴幸枝編著（2019）『グローバル社会における異文化コミュニケーション―身近な「異」から考える』三修社
- ・池田理知子編著（2010）『よくわかる異文化コミュニケーション』ミネルヴァ書房
- ・八代京子、町恵理子、小池浩子、吉田友子（2009）『異文化トレーニング「改訂版」―ボーダレス社会を生きる』三修社

海外の学生と日本語で世界の課題を話し合おう——オンライン協働学習

鄭 恵先

このシンポジウムは、もともと、コロナ禍の中で国際共修授業をどうやってオンラインへ移行したのかを報告する場ですが、この科目については、最初からオンラインを前提として開発されたという点で他の科目とは異なります。実は、この科目については3年前にもこのシンポジウムで発表したことがあります。そのときは、まだ北大と韓国嶺南大の2大学で行なっていました。その後、2018年度から香港大が加わって、現在はzoomで3大学を結んでの形式となっています。

○授業の特徴

授業の内容は、3大学の学生が、オンライン上で、日中韓の混成グループを作って、世界の課題をテーマに協働学習しながら、現状を分析し解決策を提案する、というものです。主な受講生は、北大の学部日本人学生と、韓国と香港の大学で日本語を専攻する学生です。各大学10名ずつの30名定員ですが、実際の受講生は、20名あまりというのが現状です。

この授業の特徴を三つにまとめてみました。まず、COLL型授業であることです。COLL (Collaborative Online International Learning) は、文部科学省のHPでは「オンラインを活用した国際的な双方向の教育手法」と定義されています。自国にいながら国際化を推進する手法として、近年様々な教育現場で注目されているかと思えます。

二つ目に、「3大学・双方向の交流」という枠組みです。この科目は、日中韓のそれぞれの大学の

正規科目として、安定した体制のもとで、学生同士が「対等な関係」で取り組めるように設計されています。さらに、日中韓の混成グループを作って、双方向の密接な話し合いができる仕組みを心がけました。

三つ目に、「世界の課題を考える」というテーマです。これを協働学習のコンテンツとして位置づけることで、「グローバルとローカルの両側面から考えて行動する」という、グローカリゼーションの観点に立った、「グローバル・シティズンシップの育成」をめざしました。

北大の多文化交流科目では、ご覧のスキルの育成を目標として掲げています。その中で、この授業が特に目標とする項目は図1のとおりです。どちらかというと、課題を認識し、ともに考えるというスキルに注目していることがわかるかと思います。

○授業のながれ

授業の流れについて、まず共同授業分のみを取り出してお話します。日本と、韓国、香港とは学期開始が1ヵ月ずれています。そのため、最初の共同授業は韓国と香港の2大学のみで、グループ分けと、テーマ設定を行います。その後、日本側の学生が、気に入ったテーマのグループに合流する形になります。そこから、中間発表に向けた日中韓の混成グループによるグループ別活動が本格的に始まります。発表は、現状の把握と問題提起をメインとした中間発表と、そこでのフィードバックをもと

◆ 育成を目指すスキル



◆ 授業スケジュール（合同授業分のみ）

回	大学	内容
1～2	韓・香	グループ分け、テーマ設定
3	日・韓・香	テーマ発表、グループへ合流
4～6	日・韓・香	グループ別活動（中間発表準備）
7	日・韓・香	中間発表
8～10	日・韓・香	グループ別活動（最終発表準備）
11	日・韓・香	最終発表

図1 授業の目標と流れ

にあらためて議論して得られた具体的な解決案を示す最終発表の、あわせて2回行われることになります。

○使用したツール

それでは、ここから具体的に使用されたツールと、それがコロナ禍でどう変更されたかをお話したいと思います。最初にグループのメンバーとテーマが決まると、zoomやLINEを使ってグループごとに話し合いを行います。そして、その中で、Googleスライドという共同編集ツールを使って、グループ別に発表準備を行います。教員を含めての全体での話し合いは、zoomとGoogle Classroomを使います。そこでは常に、教員からのフィードバックはもちろん、Googleフォームを使った自己評価と、ブログレスレポートによる各グループの進捗状況の報告が行われます。これらの活動をくり返しながら、パワーポイントによる中

間発表、ポスターによる最終発表という流れで活動が続きます。それぞれの発表では、zoomやGoogle Classroom、そしてGoogleフォームなどのツールを通して、教員からのフィードバックと、他グループのメンバーからの評価とコメントを受けることになります。

○コロナ禍での変更点

それでは、ここで「コロナ禍で変更した点」を3点ほどご報告します。まず、以前はそれぞれの大学では教室に集まっていたのが、今回は同じ大学の学生同士もすべてオンラインによる活動になりました。実は、去年、香港でデモがあったときに、香港大の学生のみが自宅からアクセスすることがあったのですが、それが今年は全員同じ状況になったということです。そこで、今学期は、グループ別の話し合いと作業はすべて授業時間外に行ってもらい、授業時間内では進捗状況の報告と学生の質問への対応のみに集中しました。

二つ目に、以前は最終成果物のポスターをそれぞれの大学で掲示して、クラスメート以外の人にも見てもらいましたが、今回は、成果物をホームページに掲載することで対応しました。

三つ目に、北大では、最終発表のあと、1カ月ほど単独の授業があるのですが、そこでふり振り返り活動としてワールドカフェ形式の茶話会のようなものを行っていました。今回は、それもzoomのブレイクアウトルームを使ってオンラインで行いました。

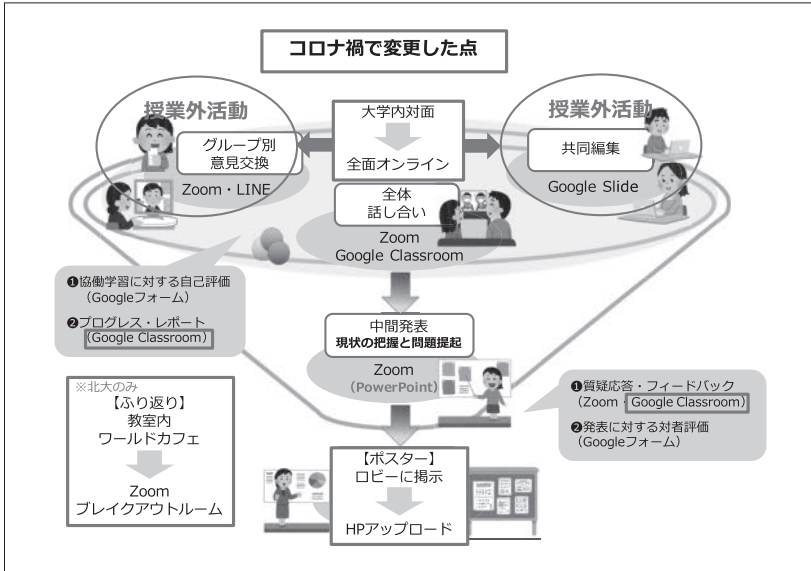


図2 授業の使用ツールとコロナ禍で変更した点

他に、これまでは口頭やワード提出だった報告やフィードバックのツールとして、Google Classroomへの書きこみをより積極的に活用することになったのも変更点の一つと言えます。

○全面オンライン化による課題

これらの実施方法の変更によって、いくつか課題も見えてきました。まず、全面オンライン化で、効率的な時間活用が可能になった反面、学生同士、学生と教員間のラポール形成には若干難しさを感じたのも事実です。また、以前はポスターを本学のロビーに掲示することで、ほかの留学生や教職員から、コメントシートによるフィードバックを受けていました。しかし、今年はそれが難しく、北大

生の最終レポートに生かすこともできなくなり、達成感の低下につながったのではないかと心配しています。最後に、授業最終日に教室の中で行っていたワールドカフェでは、模造紙に付箋を貼りながら話し合いをして、自分たちのふり返りを可視化するという活動を行っていました。それができなくなり、どうしても、noonのブレイクアウトルームでは、教員の関わり方が難しいと感じています。ちなみに、今学期の学生達の成果物は、我々の所属組織（北海道大学高等教育推進機構国際教育研究部）ウェブサイトに掲載しています。時間の都合上、ここでお見せすることはできませんが、よかつたらぜひ一度覗いてみてください。

○「オンライン協働学習」の履修者および授業時間の調整について

—フロアからの質問への回答

北大の参加者は全員日本人学生です。他の大学の参加者は、一部そうではない人もいますが、基本的に香港では香港の大学で日本語を専攻している香港人、韓国では韓国の大学で日本語を専攻している韓国人となっています。

授業時間の調整についてですが、90分授業の中で60分がかぶるように、幸いなんとかうまくやれています。残りの時間は各大学の中で、他のやり取りや確認などに使っています。今学期は各大学での授業も全てオンライン化したため、学生同士のグループ活動を全て教室外に移したので、あえて全体

の話し合いの時間は最小限にしたということもあります。

参考文献

- ・鄭惠先・菊池誠治（2018）「日韓協定校間を結ぶオンライン協働学習の効果と課題」北海道大学国際連携機構国際教育研究センター『国際教育研究センターブックレット2 オンラインでつなぐ協働学習・複数国・地域間での多文化交流型授業の実践』pp 39-53
- ・ローランド、ロバートソン著・阿部美哉訳（1997）『グローバルゼーション―地球文化の社会理論―東京大学出版会
- ・「平成30年度大学の世界展開力強化事業」COE型教育を活用した米国等との大学間交流形成支援／公募申請状況について：文部科学省 https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/sekaienka/1405090.htm（2021年3月11日閲覧）

世界の7000の言語と日本語

平田 未季

この授業は他のクラスとは違い、フィールドワークや成果物を作ることがない、内容志向の授業で、常時25名程度の学生が参加しています。今回の発表では、オンラインで授業をやってみた結果生じた問題を二つ紹介し、それにどのように対応したかをお話したいと思います。もったいいやり方があるという方もいらっしゃると思うのですが、そういった点も含めて、ぜひ意見を共有できればと思っています。

○授業の概要と目的・目標

まずこの授業の概要です。授業の目標は、「世界の言語と比べながら日本語の特徴を知る」「自分が持っている知識を外から眺める視点を持つ」という2点です。受講者は、中上級レベルの留学生と日本人学部学生です。まず、日本語が中上級レベルの留学生。彼らにとっては、日本人留学生との交流の中でより深く日本語を理解する場となります。また、特に中級の学生たちは普段、学内で教わる立場であることが多いので、自分が持っている言語の知識、または学習者としての経験を「教える者」として参加するというのが特徴です。一方、主に1年生の日本人学部生には、世界の中の一つの言語として日本語を理解すること、また、留学生との交流の中で非母語話者の視点を取得してもらいたいと思っています。授業の活動を通じて、「複数の対象を比較・分析する」「抽象的なことをわかりやすく説明する」という二つのアカデミックスキルを習得するということも、この授業の目標の一つです。

日本語の使いにくいシステムを直そう：トルクメニスタン出身の学生の発表

1 日本語には助数詞が500種ほど存在しているそうですが、実際に使われている助数詞は100種だと言われています。

椅子を数える 脚(きゃく)	織物を数える 反(たん)	家を数える 軒(けん)
1脚(いつきゃく)	1反(いつたん)	1軒(いつけん)
2脚(にきゃく)	2反(にたん)	2軒(にけん)
3脚(さんきゃく)	3反(さんたん)	3軒(さんけん)

3 枚(まい)をなんでも数える時利用できたら、日本語を使うのは簡単になると思います。

たとえば：
人が4枚いました。
ビール3枚ください。
車が100枚以上壊れました。

2 覚えにくいかもしれないので、一つのユニバーサル助数詞があったらいかがでしょうか？

変な質問かもしれませんが、面白かったです。枚を選ぶのは面白いと思いましたなぜですか？

留学生の方々の日本語への不満をいろいろと知ることができ非常に面白かったです。質問なのですが、序数詞を一つに統一すべきという意見がありましたが、「～枚」「～つ」「～個」の方が汎用的だと思います。いかがでしょうか。

今までは意識したことはありませんでしたが確かに日本語の難しい点はたくさんあると改めて感じました。序数詞を統一する例として「こ」や「つ」ではなく「枚」にした理由は何があるのでしょうか？

図1

この「言語を外の視点で眺める」という事例を紹介します。先学期、個人のポスター発表で「日本語の使いにくいシステムを直そう」というテーマで発表してもらったところ、トルクメニスタンの学生が「日本語には助数詞が多すぎて覚えにくいので、一つのユニバーサルな助数詞として「枚」を使ったらどうか」という提案をしました。これについて留学生からは共感の声が相次いだのですが、日本人学生からは、「面白いがなぜ「枚」なのか？」「つ」や「個」のほうが汎用的ではないか？」という意見が出ました。その言語の何が覚えにくい、難しいのかという感覚が、母語話者と学習者ではかなり視点が違うということがわかる事例だと感じます。こういったことを、活動を通じて発見し、互いに「なぜそうなのか」を説明し合うということが、授業目的を達成する一つの方法です。

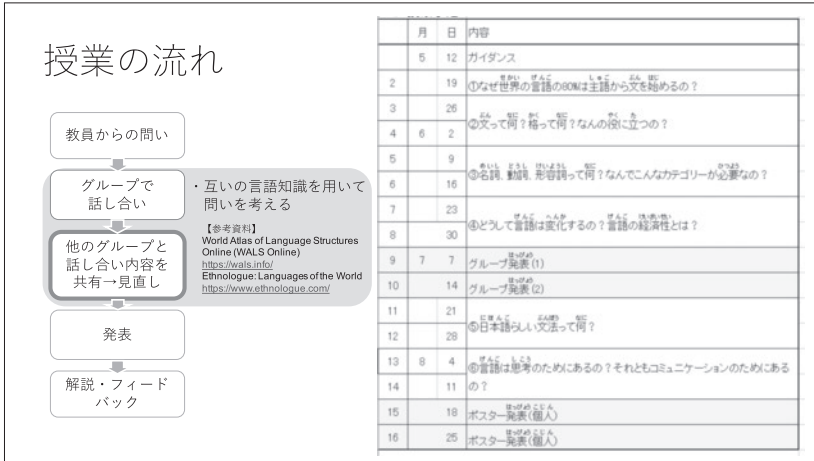


図2

○授業のながれ

次に授業の具体的な流れです。まず、図2に示したような言語に関する問いを教員から提示して、それについてグループで話し合いをしてもらいます。その時、互いの持つ言語知識を用いて、問いに対する考えを深めてもらいます。スライドに提示したような参考資料も提示します。通常はグループで話し合ったあと教室で発表という流れになるかと思いますが、この授業の大きな特徴として、その中間にもうひとつ作業を入れています。他のグループと話し合いの内容を共有し、そこで質問やコメントをもらって、自分たちの発表内容を見直すというプロセスです。

具体的に言うと、まずグループでの話し合いの内容をA4の紙1枚に一言でまとめます。これによって簡潔な説明ができるようになります。発表時間を短くするという効果もあり、聴いているほうもわかりやすく

評価	
課題	40%
評価基準： 締め切り内の提出、授業の理解度、内容の質	
参加度	20%
評価基準： 授業・グループワークでの発言量、発言の質、ディスカッションへの貢献	
発表	40%
評価基準： 授業の理解度、発表・資料のわかりやすさ、ユニークな視点、質問・コメントの量と質	



特にいい
発言には
金色シール

図3

なります。このような1枚の紙を持って、グループの個々のメンバーが、他のグループに行き、自分たちのグループの話し合い内容を共有、それに対して質問やコメントをもらいます。このプロセスの目的は、グループの全員が自分たちのグループの発表内容を理解し、他者に説明できるようになる、すなわち参加度を上げること、さらに、発表前にグループの外の視点を得ることで自分たちの内容を見直し、わかりやすい発表を考えることができるという2点です。

○評価について

評価は図3に示した配分で行います。赤字の部分が交流活動に関する部分の評価です。通常の対面授業の場合は参加度、特に発言量はアナログな方法で評価を行っていました。それぞれの参加者がネームカードを持っており、教員が目視で発言しているところを確認

する、あるいは、発言の質やディスカッションへの貢献の評価については、全員にシールを渡して発言した人にはシールを貼ってあげる、特にいい発言やディスカッションに貢献した発言をした人には金色のシールをあげる、といった方法を利用して評価していました。

○オンライン化による効果

2020年度は授業が全面的にオンライン化されたため、この授業もzoomとGoogle Classroomを利用した同時配信の形で実施しました。ちなみに2020年度の受講者は留学生が15名、日本人学生が13名です。留学生は最終的に残った人数が12名と、通常と比べて歩留まり率が高かったという印象です。その要因の一つとして、Google Classroomでは教員に意見やコメントがしやすかったということが挙げられると思います。普段であれば学生から授業への要望があったとしても、さほど授業の内容を変えたりはしないと思うのですが、オンライン化は初の試みであったため、私もかなり学生の声を聞いて活動内容を変えたところがありました。そういった点がもしかしたら歩留まり率の高さに貢献したのかもしれない。

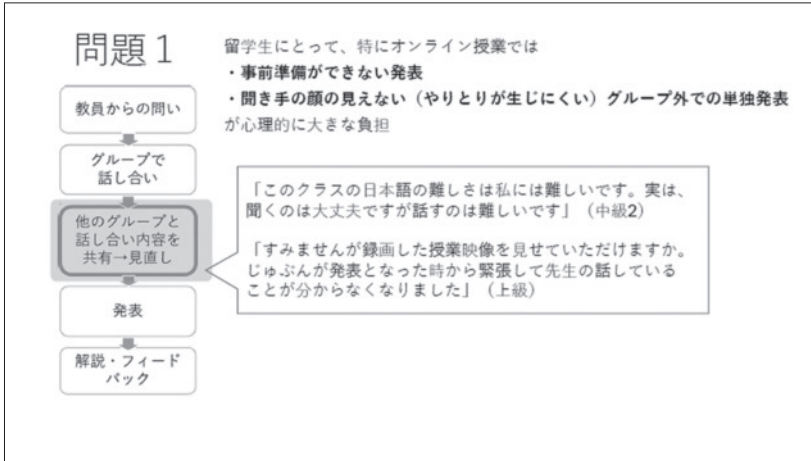


図4

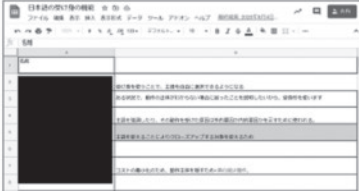
○オンライン化による課題とその解決の試み① ―発表内容の共有―

ここからはオンライン化に伴って生じた問題2点とそれに対する対応を説明したいと思います。まず一つ目は、先ほどこのクラスの特徴だと述べた、グループでの話し合いと発表の間に行う「他のグループに発表内容を共有する」というプロセスが、留学生にとって非常に大きな心理的負担だったという問題です。オンライン化を行った当初は、今まで行ってきた活動をそのままZoom上で行おうとしたのですが、この「他のグループに発表内容を共有する」という活動について、「非常に難しい」「緊張して頭が真っ白になる」といった意見が多く寄せられました。理由を詳しく聞いていくと、この活動は普通の発表と違って日本語で原稿を作るなどの事前準備ができない発表であるということ、また、顔が見えるグループでのディスカッションと

解決策1 Google アプリの活用

グループ毎の話し合いを同時進行形で書き込む

スプレッドシート



Jamboard



【利点】 対面時と同様、他グループの話し合い内容を参考にできる
教員からのアドバイス・コメントを全員で共有できる

図5

違って聞き手の顔が見えないということが大きな負担になっていたことがわかりました。

これに対応するために、まず一旦、この活動を取りやめることにしました。この活動の代わりに、スプレッドシートやJamboardを活用して、グループごとの話し合いを、結果だけではなくそのプロセスも含めて同時進行でそれぞれのツールに書き込んでもらうという作業をしました。この利点としては、対面時と同様に話し合いの途中で他のグループの話し合いの内容を参考にできるということがあります。さらに対面になかった利点としては、教員のアドバイス・コメントも共有できるという点が挙げられます。対面時には教員がグループを回ってしていたアドバイス・コメントは他のグループとは共有できませんでした。それがこういったツールを使うことで、教員のアドバイスもこの中に書き込むことができ、他のグループと共有できるようになりました。

反対に欠点は、やはり同時進行で出た意見を書き込むとなると、非常に時間がかかるということ、そしてスプレッドシートなどでは前の人が書いた内容に後続の人が大きく影響を受けるということです。例えば発表に対する質問をコメントシートに書いてもらったところ、1番最初の人が質問ではなく「とても勉強になりました」というコメントを書きました。そうすると、そのあとの人たちもみんな質問ではなく同様のコメントを書いてしまいました。この時のクラス活動は、発表者が「クラスメートの質問の中から自分が最もいいと思ったものを一つ選んで回答する」というものだったので、発表した学生は、コメントしかないので質問を選ぶ活動ができないがどうしたらいいかという内容のメールを教員に送ってきました。このように、オンラインツールを用いて同時進行で意見を共有するという作業には、前の人が書いた内容に後続の人が大きく影響されるという問題があります。

さて、ここまで「他のグループに発表内容を共有する」という、留学生に負担の大きい活動は中止して対応したとお話ししました。Googleアプリを使うことでこの活動の目的の2番目「発表の前にグループの外の視点を得て内容を見直す」という点は達成できましたが、「グループの全員が発表内容を説明できるようにする」という1番目の目的は達成されなままです。ですから、何とかこの活動を再開したいと思い、心理的な負担を減らすためにお互いの顔が見えるやり取りが生じるような工夫をしました。

まずは先ほど述べたJamboardの1ページ目を自己紹介ボードにして、Jamboardにアクセスした際、常にどんな人がその場にいるのかが目に入るようにしました。これは随時アップデート可能としてい

ます。また、発表前の雑談を義務化しました。ただ、雑談が盛り上がるためには指示の仕方が重要だということもわかりました。例えば、ただ「話しましょう」「お喋りをしましょう」という指示ではうまくいきませんでした。雑談が盛り上がるには、例えば①どのようなことを話すのか自分の例を見せる、②何かビジュアル的なものを見せながら話せるようにする、③話題と時間をかなり細かく指定する、という指示を出すとうまくいくようです。

○オンライン化による課題とその解決の試み②—評価

二つ目の問題は評価です。先ほど述べた通り、交流部分の評価はかなりアナログな方法で行っていたので、これをオンラインでどのように測るかということが問題となりました。まず授業全体での参加の評価は、ルーブリックを細かく提示して行いました。例えば、目で見えてわかるチャットの発言量、書き込み量などを組み込んでいます。そして、その点数をその日のうちにGoogle Classroomを通じて各学生に通知しました。Google Classroomを使っている方は「存知かと思いますが、Google Classroomには限定公開のコメントという機能があります。教員とその学生の間だけでコメントのやり取りができるという機能です。これを使用すると、評価に疑問がある人は気軽にコメントで質問することができ、教員からも評価基準などを説明することができます。

もう一つ、グループ内での参加度の評価についてです。私がブレイクアウトルームをすべて見てま

問題2 参加度の評価

課題 40%

評価基準：締め切り内の提出、授業の理解度、内容の質

参加度 20%

評価基準：授業・グループワークでの発言量、発言の質、
ディスカッションへの貢献

発表 40%

評価基準：授業の理解度、発表・資料のわかりやすさ、
ユニークな視点、質問・コメントの量と質



図6

わることではできないので、個々の参加者に自己評価を
してもらいました。これもルーズブリックを提示して
0〜3で評価してもらいました。基本的には学生の
自己評価をそのまま採用しますが、あまりにも自己評
価が低い、あるいは高い人には教員から限定公開コメ
ントを通じて、評価の訂正を提案しました。

以上のような形で今回授業を行いました。授業の
オンライン化によって二つの問題が生じ、その解決策
がうまくいったところも、うまくいかなかったところ
もあります。ぜひ皆さんのコメントをいただければ
と思います。

全体質疑応答

2021年2月に行ったシンポジウムでいただいた質問とそれに対する回答を紹介します。

○「多文化交流科目」について、もう少し詳しく教えてください。

私たちが所属する「北海道大学高等教育推進機構国際教育研究部」のホームページに「多文化交流科目」という項目があります。ここにリーフレットがあり、科目の構成・概要について書かれています。今学期提供した授業もこちらに提示されています。今回は全面オンライン実施になりましたので、開講していない科目もありますが、だいたいこのように開講されました。

また、ホームページ内に「刊行物」というページがあり、ここに「教職員の手引き」や過去のブックレットが公開されています。ブックレット1では開発の経緯や科目概要にも触れていますので、こちらをご覧ください。と「多文化交流科目」がどういうものなのか、より一層ご理解いただけるかと思えます。

今の科目の運営について、基本的には「全学教育科目（一般教育演習・多文化交流科目）」として運営されていますので、大きく言うと全学教育科目の中の一つに位置づけられています。つまり、全学教育が運営している科目の方針に則って授業が行われるということです。今年度の全学教育科目は、原則オンラインという通知が出されたので、多文化交流科目もそれに則ってオンラインでの実施

をお願いしています。ただし、他の一般教育演習と同じように、基本的に、最終的な判断は各ご担当の先生が行うことになっています。ですから、どうしてもこの部分は対面でやらないと都合が悪い、ということがあれば、必要な手続きをとった上で実施していただいています。

また、目標などはすでに科目開発の時点で共有していますので、それを前提にして各科目をご自身の専門の領域で考えていただくという授業提供の流れになっています。さらに、今のところ私たちの所属する高等教育推進機構国際教育研究部という組織が提供していることになっていますが、全学の他の先生にもご協力を呼びかけています。例えば、朴先生・奥本先生は同じ組織の違う部門なのですが、かなり前から科目提供をしていただいています。医学部の先生にも現在1科目ご担当いただいています。今後科目の幅を広げていくために、理系の先生や、社会科学系の先生などにも科目提供いただければと考えています。（青木）

○今回、海外からオンライン授業に参加する学生について、特に中国からはアクセスに制限等あると思いますが、どのように対応しましたか？

北海道大学では昨年度末にELMSという学内ラーニング・マネジメント・システムが更新され、Googleと機関契約が行われました。これにより、北大のID・パスワードを持っている人は契約されたGoogleのアプリにアクセスできるようになりました。こちらで提供している、多文化交流科目を含む日本語

科目を履修したい留学生は、まず履修登録をします。その際に、全在學生に付与されている、学内のシステムに入るためのIDとなるメールアドレスを提出してもらい、教員がそれを利用してGoogle Classroomに学生を招待する、という形になっています。この学内システムを通じたことによるものかどうかはわかりませんが、今のところは中国を含め、どの地域から参加している学生も問題なくGoogleの各アプリにアクセスすることができています。(平田)

○各授業報告であった「偶然性」(小林)、「雑談性」(式部)、「体感(五感)」(高橋)、「ラポール形成」(鄭)など、点数化しにくい点の重要性が挙げられていましたが、それに対する評価や今後の工夫を聞かせてください。

私に関しては、点数ではなくて、授業運営上の困難として挙げたものです。これはおそらく、「対面ではない」ということでコミュニケーションの限界が生まれ、特に私が「偶然性」と呼んでいるものや体感、直接的なコミュニケーションのようなものが、どうしてもオンライン授業では抜け落ちてしまうということです。これは、点数の問題というよりも、授業の運営のしかた、設計のしかたに強く影響するものだと思います。どうすればいいかということに関しては、私は今答えを持っていません。これは、オンライン授業をしている、ほぼ全員が困っていることではないかと思うので、ぜひみなさんのお話をお聞かせいただければと思います。(小林)

私は「体感」そのものは評価に直接的には繋がらなくてもいいと考えています。小林先生がおっしゃった通り、どのように授業をするか、そこで何を感じ取ってもらいたいのか、ということが重要になります。私が「体感」してもらいたいのは、深い理解をしてもらいたいからです。その深い理解を、レポートなどの成果物で表現してもらいたい、というのが私の授業です。例えば留学に行くと、いろいろなショックを受けて、ものの見方が変わる体験をする人が多いです。私の授業はまさにそういった体験で、何かテーマについて考えるときに、表面的な理解ではなく深い理解をすることによって、世界の新しい見方をして欲しいと思っています。（高橋）

私も同じように「雑談性」そのものを評価に繋げるというわけではなく、学習環境をよりよくするために「雑談性」が一役買っていたのだという気づきを得た、ということです。今後の授業の工夫として雑談を重要視していこうかと思っているので、平田先生のお話にもあったように、こちらの提示のしかたなど、雑談するポイントを考えていきたいです。これまでの教室文化とはガラッと変わって、リラックスしながら受けられる、自分の学びが深まるような環境を自分自身で整えていけるような自由な雰囲気を作り出していきたいと考えています。（式部）

先ほどの発表で、学生同士、それから学生と教員間のラポール形成が難しいと話したのですが、よく考えてみると、学生同士はそれほど苦痛ではなかったのかもしれない、みなさんのお話を聞きな

がら思いました。私の授業の場合はもとオンラインで、海外の大学の学生たちとやりとりをするのですが、グループに分かれて話し合いをする際、イヤフォンもしていますし、学生同士は他のグループのことをさほど気にかけていないようです。しかし、教員は学生の様子を把握しにくくなりました。教室では各グループが活動している様子を俯瞰的に見ることができたのですが、完全オンライン化によって、それができなくなりました。また、授業前、授業後などに学生とそれこそ雑談のレベルで進捗状況などを話し合うことで様子が掴めたのですが、それが全くできなくなったもどかしさがあつたと思います。（鄭）

多文化交流科目では汎用的なスキルの育成を主眼にしていますが、これも点数化がしにくい部分です。それと同じように、雑談など今まで可視化されていなかった環境が、いかに授業に機能していたのかが浮き彫りになったということではないかと思います。それらが結びついて、深い理解や汎用的スキルの育成に貢献していた面もあるのかもしれないと今お話を伺っていて思いました。

私自身は、高橋先生がおっしゃっていた「信頼関係」の重要性を改めて感じました。それを、いかにお互いに会わないで、短時間で育成し築いていけるのか、その土壌の上にいかに一緒に授業を組み立てていけるのかが重要なのではないかと思いました。（青木）

鄭先生のお話を受けて付け加えます。私のクラスでは逆のことが起こっていて、クラスのメンバー

とずっと知り合いたいという欲求があったようです。グループワークのメンバーをどうするか学生に相談したところ、なるべく変えて欲しいという意見が多く出ました。お互いに、クラスのメンバーが27人いるということは知っていても、直接話せる人はブレイクアウトルームで一緒になった人だけです。だからなるべく変えて欲しい、いろいろな人と知り合いたいという意見が私のクラスでは多かったです。

また、偶然性や雑談性に関わることですが、私は多文化交流科目を三つほど担当していますが、対面授業のときは授業が終わってから教室に残って話す学生が多くいました。そこで話が膨らんだり、考えが広がったりしていたのですが、こういうことを、どうしたらオンラインでできるのかを、課題として考えていかなければならないと思っています。（小林）

○この状況が改善された後でも、オンライン授業を続けていきたいですか？

私の担当するオンライン協働学習という授業は、もともと「オンライン授業」として企画されています。香港と韓国に時差がほとんどなく、学期のズレも1か月で済んでいるため、なんとか運営できています。今後、このオンライン協働学習をもっと広げていきたいと思っていますのですが、例えば時差も学期のズレも大きい欧米の国々などと、どのようにそのギャップを埋めるのかを今様々な形で工夫しているところです。そういった問題をひとつずつ解決しながらこの授業を広げていきたいなと

思っています。(鄭)

私たちが担当している「北海道大学を発見しよう」という授業ではデザインワークがメインになっています。芸術教育の中で、特に実技の授業は代替ができないもので、オンラインでやるのは不可能だと言われています。ですから、私はオンラインでの授業をオフラインの授業の代替にするのではなく、全く違うものとして考えています。「ハイブリッドにする」「混ぜる」というやり方が必要なのかと思っています。

このシンポジウムの中で繰り返し言われている、交流形成や共感、信頼性、経験などはオフラインだからこそできることです。デザイン教育の中でも、質感を見たり、体験したりすることはオンラインでは難しいです。しかし、その一方で、オンラインだと画面が非常に綺麗に見えたり、その人がどういう風に操作してどう変えるとどれくらい変わるのか、ということが一瞬でわかったりするなど、集中度が全く違います。オンライン授業でのデザイン教育とオフライン授業でのデザイン教育は全く違うもので、今回の授業では、必要に応じてオンラインとオフラインを適宜使い分けるという実践ができたのではないかと思っています。

学生の中にはオンラインに向いている人も、オフラインに向いている人もいます。今回はオンラインでやらざるを得ない状況だったので無理矢理試行錯誤をしたのですが、それは今後「コロナ」の状況が落ち着いていったときに教育の幅が広がるという、ポジティブな面もあったのではないかと思います。

ます。

また、今回郵送で成果物のはがきを送ったのですが、それをもたらったとき、学生たちは非常に嬉しかったようです。「本当に私たちが作っていたんだ」という実感、肌感覚があったようなのですが、これはそれまでずっとオンライン授業で進めていたからこそその感動だったのではないかと思います。ですから、授業の起承転結に合わせて、オンラインとオフラインを同等のメディアとして適宜使い分けていく方法もあるのではないかと私は考えています。（朴）

実は私も今回発表しなかった授業で、オンラインで個人的にうまくいったと感じている授業があります。そちらは議論、ディスカッションしあう授業なのですが、これはオンラインでもいいのではないかと思います。オンラインの利点として、一緒に体感できないからこそ、そこも含めて「想像する」、そして想像することによる「つながり」が生まれたように思います。特に今はこういう時代だからこそ、こういったことも重要なポイントではないかと思いました。（青木）

これは平田先生もおっしゃっていましたし、他大学の先生からも聞いている話ですが、例年研究生は全員ドロップアウトしていたのですが、今回はドロップアウト率がかなり低かったです。なおかつ、例年に比べて、最終レポートの質がかなり良かったように思います。これがオンライン授業の効果なのかどうかまだわかりませんが、そういったメリットがある可能性があります。

また、政策的な話として、今回日本にいらなくても留学ができたということがあり、海外でもオンライン留学が行われていますが、オンラインで北大の授業を海外に発信するという事業が今後展開する可能性はあるのではないかと思います。オンライン授業を「したいかどうか」ではなく、可能性としてオンラインを候補に考えながら展開して行く方向もあるのかなと思います。（小林）

○日本語のレベルの問題、媒介語の能力の問題で話し合いなどに参加しにくい学生のケアが課題になっていると思います。どのように対応されましたか。

多文化交流科目では日本語レベルが上級以上のクラスと、中級からでも受けられるクラスがあり、私のクラスは中級からでも受けられるクラスでした。今回は「海外の教室でしか日本語を使ったことがない」という学生がかなりおり、当初ディスカッションのときに苦労している様子が見られました。後で学生にインタビューした際に聞いたところ、やはり最初はとても大変だったとのことですが、だいたい「日本人が優しかった」と言います。一緒に受けている日本人の方も自分の日本語を意識化し、お互いに歩み寄り、すり合わせをして、最終的にはなんとかなったということが、レベル的に困難があった学生からも日本人学生からも聞かれました。特に私の方から対処したということではありませんが、その良し悪しは別にして、「実際に川に放り込んで泳ぎを覚える」というようなことが起こったようではあります。（小林）

やはり留学生は、話す分にはいいのですが、最後の授業のレポートを書く段階になると、何が伝えたいかわかりにくくなるということがあります。私も普段日本語を教えているので、それは想定される問題でした。ですから、レポートを出す前に授業の時間を使って「レポート相談会」を行い、グループ内で添削し合う、という時間を設けました。日本人が主に教える形にはなってしまいましたが、こういった活動を通じて言いたいことを直していく時間を取りました。

あとは、留学生から見ると日本人のレポートはわかりにくいようなのですが、それでも内容的なことを指摘することは十分できたので、日本人学生にとっても有用な時間となったのではないかと思います。（式部）

今回の私たちの授業の場合は、文字情報だけではなく、ビジュアル言語も多く使いました。日本語が日本人ほどは話せないという学生の中でも、やはり写真で見れば全部伝わることもありますし、そこにのせる言葉のセンスのようなものはやはり文字言語と違う要素があります。そういったビジュアル言語も積極的に使ってみるといいのかなと今回感じました。（朴）

○最後に、オンラインでの授業提供により得たことを一言で！

「オンラインの方が参加しやすい学生もいる」ということに気づきました。特に合理的配慮を必要

とする学生は絶対に今回の方がぐいぐい参加していました。逆に、これまで私たちは「対面授業に参加しづらい学生がいる」ということに気づいてこなかっただけなのではないかと思いました。(平田)

一言で言うなら、オンラインも対面も「どちらも捨てがたい」です。しかし、やはりいろいろ工夫は必要かなとは思います。(鄭)

今回このコロナ禍で、こういう環境になって、「教員が全部わかっていて、専門家が何か教える」ということではなく、「みんなと一緒にコミュニケーションしながら作っていく」ということが学べたのではないかと思っています。私も改めていろいろな発見があって面白いなと感じているところです。(朴)

「学びの経験の構成」ということです。私たちはどんな風に学習者の学びを作って、組み立てていくかということを、本当に問われているのだなと実感しました。(高橋)

これまで対面で意識しないでやってきたことが、可視化できたというか、意識化できたという点が大きかったと思います。特に授業の内容であったり、方法だったり、もちろんできなかったことや限界もありましたが、そういうものの見直しを図れたという点が大きかったのではないかと思います。(小林)

「教室文化の再考」です。学び方というものはもっと自由になるのではないか、もっと自由と一緒にクラスを作っていくことができるのではないかと思いました。そのためにもっといろいろなやりとりがあるのではないか、という気づきを得ました。(式部)

著者紹介（掲載順）

○青木麻衣子

北海道大学高等教育推進機構国際教育研究部 准教授

○奥本素子

北海道大学高等教育推進機構オープンエデュケーションセンター
科学技術コミュニケーション教育研究部門（CoSTEP） 准教授

○朴炫貞

北海道大学高等教育推進機構オープンエデュケーションセンター
科学技術コミュニケーション教育研究部門（CoSTEP） 特任助教

○小林由子

北海道大学高等教育推進機構国際教育研究部 教授

○式部絢子

北海道大学高等教育推進機構国際教育研究部 非常勤講師

○高橋彩

北海道大学高等教育推進機構国際教育研究部 教授

○鄭惠先

北海道大学高等教育推進機構国際教育研究部 教授

○平田末季

北海道大学高等教育推進機構国際教育研究部 准教授

編集担当

青木麻衣子（北海道大学高等教育推進機構国際教育研究部 准教授）

鄭惠先（北海道大学高等教育推進機構国際教育研究部 教授）

国際教育研究部 ブックレット6

**これからの国際共修教育を考える
～コロナ禍におけるオンライン授業実践～**

発 行 日：2021年3月31日

発 行：北海道大学高等教育推進機構国際教育研究部

〒060-0815 札幌市北区北15条西8丁目

印 刷：(株)アイワード



北海道大学
HOKKAIDO UNIVERSITY